



シリーズ

TACという懸け橋

Vol.

2

「買ってくれる人」がいるからこそ、農業を続けることができる。生産者と手を携えながら、消費者とのさらなる結びつきを求め、日々奮闘するTACの姿を追う。

☐ 福岡県 JAにじ／JA全農ふくれん

☒ 新潟県 JA胎内市／JA全農にいがた

☐ 静岡県 JAとびあ浜松／静岡県JA営農センター

☐ 滋賀県 JA北びわこ／JA全農しが

☐ 愛媛県 JA西条／JA全農えひめ

☐ 宮城県 JAあさひな／JA全農みやぎ

☐ 岩手県 JA新しいわて／JA全農いわて


人参部門長 小泉充(左) JA胎内市(旧JA中条町) 大橋和則(中) さつまいも部門長 岡田友幸(右)④

部会にも顔を出し、情報交換⑤

加工用人参生産者とともに。地産地消の促進により、生産意欲も高まっている⑥

廃作26haをどう解消するのか

砂丘地帯が広がるJA胎内市(旧JA中条町)でかつて主要品目だった葉たばこの生産は、平成23年にJTが実施した葉たばこ廃作奨励金の支給により、一気に廃作が進んでしまった。

葉たばこ廃作者30人、面積26ha。「耕作放棄地につながらかねない不作付地を、どのように解消するか」「生産者の所得をどのように確保するか」——このふたつがJAにとって、大きな課題となった。

JA胎内市のTAC・大橋和則は、園芸部署と連携しながら、葉たばこを廃作した生産者や担い手を訪ね、意向調査を行った。すると、園芸品目の作付意向が多いことがわかった。

新規作物よりも「安定的に手取りの確保できるもの」がいいと考え、以前からこの地域で栽培実績のある品目を中心に野菜の作付を勧めた。以前から付き合いのあった(株)カゴメと栽培契約を結び、平成24年から加工用人参の栽培試験を導入した。また大根は、地産地消の流れから、以前にも増して、地元漬物業者が買い取ってくれるようになった。さつまいもも品質が向上し、今後の販路拡大・六次産業化が狙えるところまできた。栽培に専念できる環境づ

くりには、担い手からの評価も高い。結果として、今年度24.8haの耕作地を維持できた。

JA全農にいがたからの後押しも欠かせない。生食用人参と加工用人参の収穫期がかぶってしまうため、収穫機の増台が必要不可欠だった。農機メーカーと連携し人参収穫機の貸し出しを行った。

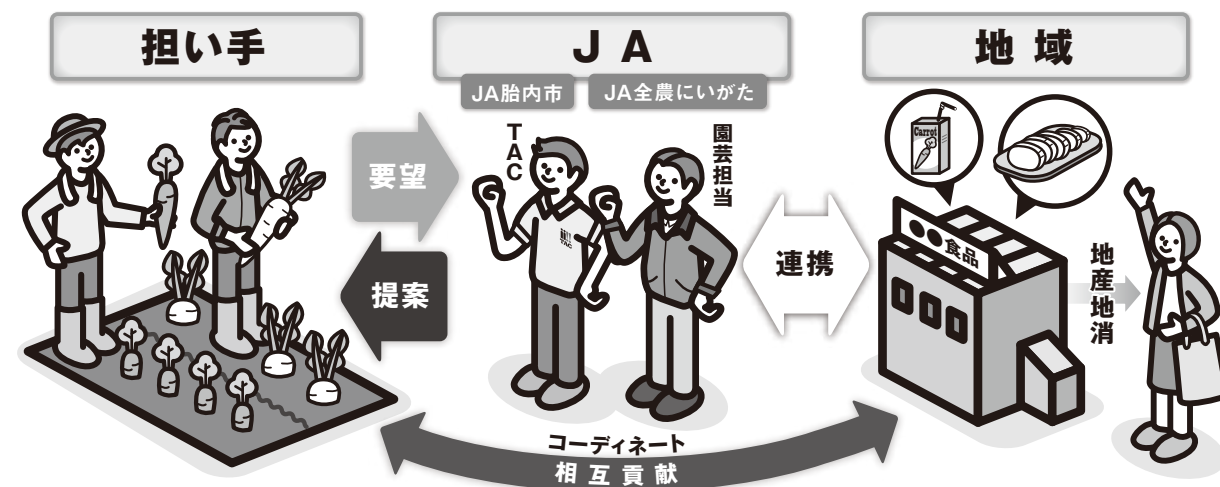
若い後継者たちとともに

この地域は、こうした取り組みも相まって若い後継者たちが確実に育っていることが強みだ。大橋は彼らとのコミュニ

ケーションを大事にする。同JAのさつまいも部門長の岡田友幸はそれに答えるように語る。「大橋さんは聞いたことに的確に答えてくれる。本当に頼りになる存在です」。

「挑戦する人たちとともに、土地柄に合ったものをつくりたい」。消費者の安全性へのニーズは、徐々に、国産・地元産の加工用野菜へも広がりを見せている。「おいしさや品質に賭ける生産者・JAの思いも感じ取ってもらいたい」。営農に賭ける大橋の情熱は、果てしなく続く。

※JA中条町は、2014年2月1日、JA黒川村と合併しJA胎内市となりました。



第8回JAグループ
国産農畜産物商談会

2014年3月12日(水)10:00~17:00/13日(木)10:00~16:00
東京国際フォーラム展示ホール 主催 JA全農/JAバンク/JA全中



TAC(タック)とは、『地域農業の担い手に出向くJA担当者』の愛称です。

TACの
役割

- ①地域農業の担い手に訪問してご意見・ご要望をうかがい、誠実にお応えします。
- ②地域農業の担い手の経営に役立つ各種情報をお届けします。
- ③地域農業の担い手のご意見を持ち帰り、JAグループの業務改善につなげます。

TACの
由来

Team for Agricultural Coordination
JAグループが一体となって
地域農業をコーディネートします。

営農販売企画部 TAC推進課
TEL: 03-6271-8276
www.zennoh.or.jp

全農